

入選

UMAでもネコといいはる君の絵は飛鳥時代の国宝かもね

結城第二高等学校

三年 深谷 梨々華

重なれば重なるほどに締め付けるわたしの嘘と信じる君と

創価高等学校

三年 井上 蓮

風が吹き雨降り開く梅の香は鳥の五感も奮い立たせて

金沢錦丘高等学校

一年 五十嵐 ひなた

アーケードゲームの地図に星印勇者の代わりなんていくつも

名古屋高等学校

二年 木村 功汰

重罪を犯した危険人物は逃走中に蚊に捕まった

名古屋高等学校

二年 今野 巧海

税理士の職業体験の日が来て表情の無い鳥電線に

名古屋高等学校

二年 三宅 航輝

水面から出した水かきふらふらと沈め沈めと宙を蹴る鴨

平田高等学校

一年 山崎 かおる

しわのある巣をはぐる指見まがってジャージャー鳴くは燕の子かな

平田高等学校

二年 陰山 悠華

真っ黒の缶コーヒーの弧を描き蒼い目玉の仔犬は吠える

平田高等学校

三年 村田 美咲

うなだれて水やる友の首白く花擬宝珠は星を吐き出す

岡山朝日高等学校

一年

赤松

音於

海原を真二つに分け背美鯨重巡洋艦黒く輝き

岡山朝日高等学校

一年

赤松

音於

亡き祖父の言の葉我に温かくすこしの骨もずしりと重く

岡山朝日高等学校

一年

金子

遼耶

いつの日か空を飛ぶのをあきらめた時ニンゲンは鳥になるのだ

岡山朝日高等学校

一年

笹野

裕矢

また会おうねっと夏は去ってゆく鳥たちのように羽をひろげて

福岡女学院高等学校

一年

辻

愛生

星空のざわめきの中へもぐり込む人を離れて息をしてみたい

福岡女学院高等学校

一年

中垣

郁花

君を思い手のひらに溜まる涙さえ濁った重油になりゆくようだ

福岡女学院高等学校

一年

柚原

結女

残像がまぶたの裏に残って星になるためまばたきをする

福岡女学院高等学校

二年

松本

夏南

図書館の借りられる本を載せる手は今の時代にあらがう重さ

福岡女学院高等学校

二年

松本

夏南

戦地へと飛び立つ鉄の鳥に乗りフェンスの向こう我が友は行く

昭和薬科大学附属高等学校

二年

島袋

乃碧

空高く飛び立っていくその背中待ってほしくて行ってほしくて

鳥取西高等学校

一年 池本 梨乃

閉じる目をこすりて車降りるとき「おかえりなさい」いちめんの星

鳥取西高等学校

一年 岡村 彩子

夏の夜静寂の海を照らすのはイカ釣り漁船と月の光のみ

鳥取西高等学校

一年 岩田 朋樹

八月の朝日傘さしバスを待つ私とスズメ重なった影

鳥取西高等学校

一年 岸本 彩希

午前九時窓越しに聞く鳥の声カーテン開けると逃げるんだらうね

鳥取西高等学校

一年 小林 日菜

夏の夜星座を見つけ指さした自転車をおす四人の背中

鳥取西高等学校

一年 田中 沙弥

帰り道エナジードリンク買う僕は一番星に今日も気づかず

鳥取西高等学校

一年 野田 遥菜

カラス鳴くオレンジの空見上げたら遠い昔に戻れる気がした

鳥取西高等学校

一年 野津 葵

一つだけ浜辺にポツンとある海星宇宙がくしゃみし歯が抜けたのか

鳥取西高等学校

一年 橋原 栄見

階段で「あいつは重い」と君の声どしゃ降りの中ローファーで走る

鳥取西高等学校

一年 花谷 歩

文字叩く指をわずかに止めながら祈るは思い重ならむこと

鳥取西高等学校

一年

廣富 育

屋根の上鳴き声麗し瑠璃鶺鴒どこにあるのか僕の季節は

鳥取西高等学校

一年

山根 快生

見渡せば周りは光る星々で見渡すだけには飽き飽きしてきた

鳥取西高等学校

一年

吉田 智哉

星空と一緒に歩く田んぼ道落ちてきそうので両手広げる

米子東高等学校

一年

足立 優色

晴れた夜星座たちはゆっくりと躍りながら前に進み続ける

鳥取東高等学校

二年

伊井 彩夏

景色さえ変わらず永遠田んぼ道星の光じゃ前はみえない

鳥取東高等学校

二年

池井 夏帆

風呂あがり麦茶に落ちた星影を飲み込んだって私はここに

鳥取東高等学校

二年

池本 奈月

大空へ旅立っていく渡り鳥どこへ向かうか僕は知らない

鳥取東高等学校

二年

上田 裕大

震える手動かぬ的にねらいつけ重なる弦音動き出す夏

鳥取東高等学校

二年

太田 楓

蒼い空はばたく鳥が遠ざかる君のいるとこ飛んでゆけたら

鳥取東高等学校

二年

大西 翔

閉ざされた心の闇に飛びこんだ尾を引く流星確かな光

鳥取東高等学校

二年 菊川 敢太

青い空飛び去っていく白鳥がブルーハワイのかき氷のようだ

鳥取東高等学校

二年 國本 凌

暗い空一等賞の北極星僕は君ほど輝けはせず

鳥取東高等学校

二年 熊田 遼佑

ほほをさす冷たい風をこらえつつかわらない空かわらない星

鳥取東高等学校

二年 倉本 大地

星と星近くみえてもおいきより君とのあいだも星のようかな

鳥取東高等学校

二年 坂田 光穂

流れ星あつという間に消えてまう願い言う暇全くあらへん

鳥取東高等学校

二年 坂本 篤祥

夕焼けを背にして歩く帰り道 重なる腕の影が伸びてる

鳥取東高等学校

二年 坂本 実伽恵

鳥のごとく空へ飛び行くおばあちゃん過ごした日々は我が胸の中

鳥取東高等学校

二年 坂本 陸

夏の夜空一面に花が咲く重低音が心に響く

鳥取東高等学校

二年 鷺見 春奈

僕を見て静かに飛び立つ白い鳥僕の心は白くはなかった

鳥取東高等学校

二年 高塚 翔太

大声暴言思ったことをすぐに言う鳥小屋みたいな国会議事堂

鳥取東高等学校

二年 竹本 直斗

重雲と雨にかくれた青い空ティッシュまるめて見たいと願う

鳥取東高等学校

二年 鳥飼 琴葉

暗やみにたくさんの星浮かんでるどれだけ見ても感動しない

鳥取東高等学校

二年 中村 彩乃

石を蹴り一人ぼっちの帰り道電柱の上の鳥が見守る

鳥取東高等学校

二年 中山 幹太

一人だけ風切る縄で軽やかに二重跳びする冬のこと

鳥取東高等学校

二年 中山 幹太

昼休み弁当箱にはにんじんの星思い浮かぶは眠そうな母

鳥取東高等学校

二年 奈良井 洸希

小テスト答が浮かばず窓を見る飛んでる鳥に答を聞こう

鳥取東高等学校

二年 西垣 悠

星型のクッキー手に取りほほえんで星触われたと喜ぶ弟

鳥取東高等学校

二年 西田 涼華

澄みきった夜空見上げてこんな日は馬の背からの星ひとり占め

鳥取東高等学校

二年 橋本 初花

お星さまきらきら光るあの星は遠く離れた故郷の星

鳥取東高等学校

二年 長谷川 未侑

冬の夜寒い寒いと見上げてたあの星空を忘れそうだよ

鳥取東高等学校

二年 八田 花音

秋の空南へむかう鳥の群れはずれた一羽あれはわたしだ

鳥取東高等学校

二年 原田 凜

星降る夜私たちの住む地球誕生した日に思いをはせる

鳥取東高等学校

二年 原田 凜

空いっぱい広がる星を手の中にぎゅっとおさめてひとりじめしたい

鳥取東高等学校

二年 平尾 優佳

まるで鳥わたしの気持ちも知らないでもう少しだけそこにとどめて

鳥取東高等学校

二年 平田 実咲

帰り道うつむきふるえる肩の上星空だけが私の味方

鳥取東高等学校

二年 吹野 葵

涼し気にピシッと飛び立つ水鳥に誘ってくれよと土手走る僕

鳥取東高等学校

二年 細田 賢汰

教科書の隅に小さく書いてあるこんな言葉が重要なのか

鳥取東高等学校

二年 松本 勝真

はばたいて去ってしまったあの鳥も私の息切れを知らないふり

鳥取東高等学校

二年 三浦 彩乃

影伸びる君と歩いた土手沿いで鞆の重さも愛しく感じる

鳥取東高等学校

二年 三浦 可奈子

通り行く鳥と授業を受ける自分隔ててるのは一枚の窓

鳥取東高等学校

二年

三橋

宥利亚

登校時川に浮んだ鳥たちとあの橋めがけようい、はじめ

鳥取東高等学校

二年

森本

桃華

満開の星咲きほこる冬の日に願いをこめて自転車またぐ

鳥取東高等学校

二年

森本

桃華

いつからか裸眼で見えた星たちが今ではひとつも見えていません

鳥取東高等学校

二年

森本

理沙

教室の窓から見える鳥たちよ誰か私と代わってください

鳥取東高等学校

二年

安岡

蘭夏

星ひかり初めて見つけたオリオン座静かに一人立ち止まる私

鳥取東高等学校

二年

山下

歩美

庭の上ことわしはくちよう探しては星夜に吸いこまれるわたしひとり

鳥取東高等学校

二年

山下

鈴加

電線で私をにらむ黒い鳥あの荒れたゴミお前がしたな

鳥取東高等学校

二年

山根

葵

帰り道に見つけた小さな鳥の巣はいったいどこへいったのだろう

鳥取東高等学校

二年

山根

圭央

にわとりは一步あるくと忘れちゃう寝起きの僕にとても似ている

鳥取東高等学校

二年

山本

悠人

夏期補習プールサイドの青い鳥ゆっくり泳ぐ三百メートル

鳥取東高等学校

二年 米原 渉

ふり返り見上げた空に思い出が映り輝く星榆のごとく

鳥取湖陵高等学校

三年 雨河 あかね

好きなこと得意なことで行く妹よ跳べあの鳥のように

鳥取湖陵高等学校

三年 小山 由美子

遠くより眺めてみれば重なって向日葵の花黄色いじゅうたん

鳥取湖陵高等学校

三年 山添 莉奈